

カンボジアでの学習支援から学ぶ教育の課題と異文化理解への挑戦

I 概要

カンボジアは内戦以降、目覚ましい経済成長が進んでいる。一方、内戦の影響が今だ残っていたり、急速な経済発展によって生まれる問題も生じたりしている。例えば、都心部以外では絶対的貧困が蔓延しており、生活の維持が困難な状況にある。都心部内でも格差が広がり、路上で生活している人々が多数存在する。子どもに目を向ければ、親の状況によって義務教育から離脱せざるを得ない状況にあり、教育の機会が剥奪されていることが問題視されている。この状況に鑑み、本活動では、学生が小学校を訪問し、十分に登校できなかったり、学習が遅れていたたりする子どもを対象にした学習支援を展開し、子どもが安全・安心に教育を受ける機会を保障することに貢献することがねらいとなる。学習支援を通して、歴史的背景と教育への影響を関連付け、子どもの実態に合わせた効果的なプログラムを検討する能力の獲得をめざす。

II 事前学習

1. カンボジアに関する学習

- (1) 歴史
- ・オンデマンド学習
- (ポル・ポト政権、カンボジアの学校教育、アンコールワットの歴史など)
- (2) 現地大学生との交流
- ・ノートン大学生とリモートで交流
- ・カンボジア言語「クメール語」の学習

2. 現地小学校活動の準備

- ・現地活動に備えたプログラム立案
- 指導案作成
- 教材研究
- ・模擬授業の実施

3. 現地活動での予定調整



プログラムプロモーションビデオです
ぜひご覧ください

III 現地活動を通じた気づき

1. カンボジアの歴史学習

～トゥールスレン博物館、キリングフィールド～

1975年から1979年までポルポト政権下で約17,000人拘束・持間・虐殺が行われた場所。博物館内部は実際に拷問で使用された部屋や器具が展示されており、当時の政権下で行われていたことを目の当たりにした。また、トゥールスレンに収容されていた人を処刑するキリングフィールドにも訪問した。人骨が見つかった場所が残されていたり、人骨が記念塔に展示されたりしている。

2. 小学校での学習支援活動の概要

学習支援活動では、子どもに対して、自分たちで考えた授業を実施した。算数や英語など子どもたちが普段行っている科目以外にも、日本の遊びや行事、言葉などカンボジアでは学習できない内容の授業も行った。また、1時間で終わる授業ばかりではなく、作成から実験やまとめを行う連続する授業も行った。日本語が通じない中、現地の大学生と連携して授業を考え、言葉の壁を乗り越えながら一緒に活動した。

【主な授業】

- ・算数(足し算・引き算・さくらんぼ計算・時計など)
- ・日本の文化(遊び・食べ物・言葉など)
- ・理科(しゃぼん玉・風の原理など)
- ・音楽
- ・書写
- ・図画工作(手形アートなど)

生活(あやとり)の授業



3. 学習支援活動の具体的内容と気づき

(1) 書写

①授業内容

- ・筆遊び
- ・日本語に触れ、実際に書いてみる

②授業のねらい

- ・普段使うことのない筆や墨に触れ、日本文化を体験する。
- ・自分の名前を日本語ではどのように書くかを学び、書道作品を作る。

③感想

・カンボジアの子どもたちは、日本の文化の書道に触れる経験がないため初めて見る墨汁や半紙に興味津々だった。日本の文字を初めて見るのにもかわらず、しっかりと集中して取り組むことができていた。合計2時間行なったが、子どもたち全員が楽しく取り組むことができていてよかった。

(2) 創作活動(折り紙)

①授業内容

- ・折り鶴の意味の説明
- ・折り鶴の折り方

②授業のねらい

- ・日本の伝統的な芸術である折り紙を体験することで、異文化への興味を持ってもらう

③授業の感想

カンボジアの子どもたちは手先が不器用なのかと勝手に思っていたけど日本の子どもと同じように器用な子も不器用な子もいた。

折り紙を通して日本の伝統的な遊びである折り紙や日本で折り鶴を折る意味を知ってもらい、折り鶴を作りながらカンボジアの子どもたちの願い事や夢を知ることができたのでよかった。

提携校のノートン大学の人たちとも交流し、子どもたちに折り紙を教えることができた。

(3) 理科(シャボン玉を使った実験)

①授業内容

- ・シャボン玉はどのようにしてできるのか

②授業のねらい

- ・表面張力や空気の流れに興味を持つ
- ・息の吹き方や道具の使い方を工夫することで、遊びながら自由な発想が身につく
- ・シャボン玉の形や色の変化、不規則な動きに触れながら、自然の仕組みに対する好奇心を育てる

③感想

シャボン玉活動をする際に、自分自身を意識していたことは、「ただ楽しむだけでは終わらない」という点である。シャボン玉を通して、一番感じたのは、子ども達の「発見する力」と「協力する大切さ」である。自分達の創意工夫を活かして試行錯誤して結果を導きだし、必死になって取り組む姿や子ども達の表情はとても印象的であった。

シャボン玉の実験中～



書写の授業



IV まとめ

(1) 教育の課題を考える

小学校での活動で、途中から授業に参加しなくなったり、授業中にお菓子を食べたりする子どもがいた。このような状況は日本の小学校では見ない光景である。また日本の子どもたちのようにみんなが同じように文房具を所有しているわけではなかった。様々な生活背景があり毎日学校に来て学ぶことができない子どもたちもいる。そんな子どもたちでも、緊張していた私たちに毎日元気に話しかけてくれ、とても嬉しい気持ちになった。彼らの笑顔に応えることは直接的には難しいけれど、子どもたちが良い環境で教育を受けるために何ができるか、もう一度考え直すきっかけを与えてくれた。

(2) 異なる文化を私たちは受け入れられるのか？

現地滞在中、多くの日本との違いに驚いた。なかでも、食文化は今でも印象に残っている。日本では口にすることのない昆虫や馴染みのない香草を食べる機会が多かった。少しでもカンボジアを体験するために食することに挑戦したが、味わうことは難しかった。しかし、カンボジアの国民性には惹かれる点があった。慣れない環境で困る私たちに対して多くのカンボジアのみんなが優しく接してくれた。ホテル滞在の最終日にはモーニングで食べることでできないメニューを提供してくれて全員で見送りをしてくれた。食文化を楽しんだり受け入れたりすることはこの滞在中には難しかったが、最終日のカンボジア人とのやりとりで、少し歩み寄れた瞬間だったと思う。このような些細な出来事が、異文化理解の一歩かもしれない。